

## シベリアの惨劇と 帰ってきた日本の現実

静岡県 飯島 久

「ブカチャチャ収容所」から「カクイ造船所へ」

一 満州へ

満州の新京（長春）に軍官学校という、日本では  
いえば士官学校がありまして、終戦の時、私はそ  
こに在校しておりました。私の棒タイには五色の  
徽章がついておりますけれども、満州という国は  
日本・朝鮮・満州・漢民族（中国）・蒙古の五民  
族が協和して作った国であるというのが建前にな  
っております。皇帝は「愛新覚羅溥儀」という  
清王朝の最後の皇帝を再び担ぎ出していたので  
すけれども、実態は日本の関東軍及び日本の高級官  
僚が満州国を支配しており、皇帝は飾り物であっ  
たことは歴史の事実でございます。

私は中学生のころ、「軍官学校」などという名

前は聞いたこともありませんでした。中学五年生  
のとき、陸軍経理学校を受験しました。近視です  
から、陸軍士官学校はダメなのです。経理学校は  
定員も少なく、大変な難関とされていましたが、  
幸か不幸か学科、身体検査、面接と次々に通過、  
後は合格通知を待つだけとなりました。と  
ころが、陸軍大臣名で「満州の軍官学校へ行って  
欲しい」という推薦状を受け取りました。勅任官  
として遇する。満州で少尉に任官すれば日本でも  
全く同様に遇する。昇進していく時も同様である。  
勅任官というのは、天皇の命によって任せられる  
軍人あるいは官僚のことで、一般大学などを経て  
将校に任官した人たちは判任官といって、陸軍大  
臣の命によるものです。陸軍省や海軍省の正面玄  
関には中央に大きな玄関がありまして、その左右  
に小さな入り口があります。正面の大きな入り口  
を通れるのは勅任官だけで、判任官では左右の小  
さな入り口しか通れません。ばかばかしいといえ  
ば、それまでですが、そんな時代でありました。

そのころ、陸軍大臣名の推薦状を断るなど、できる時代ではありませんでした。「軍官に応ず」と電報を打てば、承諾したことになるとされていました。

戦争は既に日本の敗色濃厚な時でした。ガダルカナル島以降、南方戦線は撤退に継ぐ撤退。 Guam、サイパン島にはアメリカの飛行場ができていたところで、B 29が東京へ何回も偵察飛行に來ていた時代でした。

母親が泣いて止めました。私は昭和十九（一九四四）年十二月二十二日、仲間と東京を發ち、軍官学校へは二十八日に入校しました。

学校長は日本の陸軍中將、生徒隊長は皇帝溥儀の弟「愛新覺羅溥傑」氏でした。国がいかにこの学校に力を入れていたか分かります。まだ三十歳前後の若い青年將校でした。溥傑さんの奥さんは嵯峨侯爵の娘さん、勿論政略結婚でしょうが、天皇一族につながる名家中の名家から奥さんもらった訳です。

溥傑夫妻には慧生さんと、嫫生さんという、お二人の娘さんが生まれ、上の娘さんは日本の学習院大学に在学中、天城山頂で愛する男性と心中致しました。「天国に結ぶ恋」として、日本國中、大騒ぎになりましたけれども。嫫生さんは日本人の社員と結婚されて、神戸市内に日本人として、平和に暮らしておられます。

学校に着いた日の夕飯は、食堂に連れていかれ、大きな井に山盛りの赤飯！……と思ったら、コウリヤン飯！それも馬の餌と同じ馬糧コウリヤン、とんだ入学祝いでした。とても食えた代物じゃありませんでした。

今日は何とかの祝日でギョウザとかいうご馳走であると先輩に言われ、楽しみに食堂へ行きましたら、大きな柏餅のようなものが二個。厚い小麦粉の皮に包まれた肉団子みたいな物でした。それ以来、ギョウザとはこういうものだと思っておりました。

寒い間は、まだ気候に慣れない私たちのため、

室内講義などが中心で、大事にされましたけれども、ヤルタ会談とかポツダム宣言などという国際情勢は一切知らされませんでした。東京に大空襲があったらしいとは聞きましたが、内地とは全く音信不通、自分の家がどうなったかを知る由もなかったのです。

しかし、満州・朝鮮・漢民族の生徒たちには地下組織を通じて情報は知らされていたと言います。知らぬは我々日本人だけであったのです。炊事や雑役の満州人たちは、既に中共系、国民党系の地下ルートで組織されていたのです。

蒙古系の生徒たちは興安にある軍官学校で学んでおりました。漢系と蒙古系の間は絶対相容れない関係だったようです。清という国の公用語は満州語と蒙古語で、中国語は卑しい言葉とされていたといえます。元という蒙古人の国がなくなっても、蒙古の力は根強く残っていたのです。興安にいた彼らも日本の支配下にあることを潔しとせず、ソ連軍の侵入に応じて、一斉に反乱を起こし、多

数の日系将校たちが非業な最後を遂げました。

蒙古系の反乱については、集英社一九九六年発行「満州の風」著者藤原作弥氏に詳しく述べられております。

## 二 ソ連の侵入

昭和二十年八月九日、ソ連軍は不戦条約を一方的に破棄、三方向から一斉に満州に侵入を開始しました。

ハイラルの要塞などは世界でも指折りの強固な軍事施設であったはずでした。隠顕砲といって、弾丸を撃つとエレベーター式の台座に載った銃砲は地下にもぐり、砲弾をこめると再び地上に姿を現して、砲撃、強力な三十センチ級銃砲があったはずでした。しかし、不戦条約があるからと、主力の重火器や訓練された関東軍主力部隊はことごとくフィリッピンや沖繩など南方へ移動してしまっていたのです。ソ連軍の重量戦車軍団に対抗する力があるはずはなかったのです。エレベーターだけが残っていたのですから。

軍官学校にも出動要請があつて、私たちは新京防衛に出動しました。私たちの小銃は最新式の軽機関銃、重機関銃などを持ち、満軍生徒本科生たちは重砲高射砲まで装備していました。新京周辺では最も装備の優れた軍隊であつたでしょう。しかし、彼らは地下組織を通じて、ポツダム宣言など、世界の動きを知っていたのですから、ソ連軍と戦う意識など皆無であつたでしょう。むしろ日本の敗北を今日か明日かと待っていたのでしよう。

私たち日本人生徒隊は新京・四馬路警備が任務でした。日本という銀座通りです。石畳を小さな携帯用ツルハシでコチン・コチンと叩いて、ソ連戦車が来たら落ちるような戦車壕を掘れというのがです。ソ連軍はもう新京の近く白城子<sup>ハクシヨウシ</sup>まで来ています。補充のためしばらく停まっていますが、動きだして、あの重戦車軍団や、多連装ロケット砲（カチューシャ）で襲われたら、一たまりもなかったでしょう。「ここで死ぬのかな」不思議と冷静な気持ちでした。

十五日の昼、重要な放送があるという連絡が入り、私たち四馬路近くの日本人の家に入り、ラジオに聴き入りました。家の中はあわてて逃げたのでしよう。食卓の上は散乱して、可愛いピンク色の茶碗にはご飯粒がそのまま、まだ三、四歳の女の子のものでしよう。無事に日本へ帰れたでしょうか。ピンクの茶碗の光景は一生忘れることはないでしょう。戦争とは、むごいものです。そしてむずかしい言葉ながら日本の終戦を、玉音放送として聴いたのです。

### 三 軍官学校の解体

日本軍の敗戦により、軍官学校は解体され、朝鮮、満州、漢（中国）の生徒たちは、それぞれに別れていきました。もう、そこには国共分裂、朝鮮の南北分断など戦後の国際情勢に大きく関わる動きがでていたのです。

私たち日系生徒、約三百五十人余りは南嶺の軍事施設跡地に入りました。武装解除などで武器はすべて放棄した事になっていましたが、軍隊組

織はそのまま、何を隠して持っているかも知れず、ソ連軍が直接、我々の建物に近づくことはありませんでした。彼らは日本人難民のいる学校などを、野獣のように毎夜襲っていたのです。

ある日、離脱していった朝鮮系の生徒が一人、国民党将校の服装をして我々を訪ねてきました。派手な色合いで、帽子から靴、軍刀、皮の長靴に至るまで皆、新品。「国民党には優秀な指導者が不足している。君たちが来てくれるなら、昨日までのことは忘れ、将校として喜んで迎えよう。」

という誘いでした。国民党？ 蔣介石の軍、昨日までの敵軍です。そこへ来てくれとはなにごとだ。叩き殺せなどと息巻く連中もいましたが、隊長が「待て。彼は日本人ではないのだ。それよりも面白いじゃあないか。我々はこの先どうなるか分からぬ。国民党に入って一暴れして見るのも面白いぞ。行きたい者は行つたらよい。」

結果として四人の仲間が彼について国民党へ行ったのです。その後、満州の支配権を巡って中共

軍と国民党軍は分裂、内戦状態になってゆき、二人はその戦闘の間に戦死、二人は何とか無事に日本に帰りましたが、うち一人は左足首を打たれて歩行が困難です。彼らはどのような経過をたどったか、黙して語る事はありませんでした。

朝鮮系の生徒は四人、二人が戦死、二人は韓国に戻り韓国士官学校へ入校、朝鮮戦争時には中級隊長クラスとして、生死の境をくぐりぬけていきました。その後、学会、実業界の重鎮として今日でも健在です。

満州系の生徒は、実質満州が中国の支配下に入ったため、国民党系と中国共産党系に分かれていったようです。蔣介石が中国本土から台湾に逃げたのに従い、台湾で大実業家として成功した生徒もいるし、中国共産党支配下の中国・満州に残り、地方の知事クラスにまでなった人たちがいるようです。一部の人は、未だに親交を重ねております。しかし、満州・中国に残っていた人々は、その後の文化大革命で、軍官学校という日本帝国

主義政策に協力した人物として、地位を剥奪され、ひどい目にあつた人たちが多くと聞いております。江青らが失脚した後、名誉は回復されたようです。

#### 四 作業大隊の結成

ソ連側から指令が出たのは、九月二日ごろです。スターリンが極秘に出した指令「日本人には償つてもらおう。」これがシベリア強制連行になつていったのです。ソ連は日本軍とは事実上、戦闘状態などなかつたのです。ソ連の一方的満州侵入だつたにもかかわらず、多数の日本兵をシベリアへ拉致抑留したのです。長い戦争で最も被害を受けた中国は、国際法に則り日本兵を帰国させているのに比較して、いかにソ連が非道な国であつたか分かるよい例でしょう。スターリンが最も狙つていた満州占領は、中国を先頭に英米などの強硬な国際世論に押されて成功しませんでした。しかし、北朝鮮の領有は金日成首班の政府を作ることに成功、今日に至っています。軍官学校の先輩たちの中に北朝鮮の人たちもいたのですが、その消息は

全く知れません。

ソ連側の指示は千人単位の作業大隊を作れという事でした。私たち日系生徒は二百三十四人が「集成第十三大隊」に編入されました。「集成」とは寄せ集めのこと、いくつかの日本軍組織をまとめて、ほぼ千人単位にしたのです。満州南部は既に国共内戦状態で不穏であるから、北満州から黒竜江を渡つてソ連領に入る。それからシベリア鉄道を経てウラジオストックへ出る。そして船で日本へ帰るといふものでした。正直、ほとんどの日本人は国際法からいっても、それならばよいと疑つていなかったでしょう。そして、この二百三十四人が悲劇のブカチャチャへと拉致されたのです。残りは八十人ほどがイルクーツクへ向かいました。ここはバイカル湖の傍らの大都会、建物も衣服も、何よりも食料が何とか供給されたため死者はわずか四人ですんだのです。彼らは十月二十七日に新京を出ています。

私たちには、新京地元で親戚知人などがあるも

のは脱出しろという指示が出ていました。軍官学校生徒は「生徒」であって軍人ではないというのが国際法です。しかし、ソ連が法を守るはずもなく、逃げるあてがあれば逃げろという指示だったのです。知人といっても、他人の世話をする余裕があるはずもなく、家があったとしても、そこに住んでいるはずもないのです。要はあてもなく逃げろということですよ。むしろ勇気のいることでした。しかし、四十人ほどが脱出していきました。彼らの運命は千差万別、まさに小説そのままの数奇な運命をたどった者が大勢おります。

私などは脱出するだけの勇気もなく、区隊ごとまとまってブカチャチャに向かって行きました。新京発昭和二十年九月十三日、満州は既に秋一色、列車が北へ北へと走る途中、沿線沿いに南へ南へと向かう老人・婦女子だけの日本人難民の集団を貨車の窓から何回も目撃しています。彼らのうち何人が無事日本の土を踏むことができたのでしょうか。既に満州人たちの襲撃に何回も会っていた

のでしょう。よれよれの汚い黒ずんだ服を着て、中には幼児を抱え、無表情に列車を見送っておりました。開拓団などに、まだ僅かに残っていた壮年期の男子は八月一日に根こそぎ兵隊に召集されてしまいました。老人、婦人、子供だけの開拓団になったのです。僅かに残っていた兵器類も軍に持ち去られました。一方、軍に入った八月一日の人たちもまた、軍隊内部では新兵として最下位に扱われ、持つべき銃すらままにシベリアに散った老兵となっていたのです。

##### 五 ブカチャチャ

一九四五年十月二日、列車は停まり汽笛の音を聞きました。港？ そんなはずはないのですが、まだ心のどこかにウラジオから日本海を渡って帰国という淡い夢があったのでしょうか。

この奇妙な名前は、シベリアにいた先住民（蒙古系）が牧畜用の柵を指した名のようなのです。

列車から降りた最初の仕事は水くみ、アギタ川の水面は既に固く凍っておりました。

一九三〇年代にソ連はフィンランドと国境をめぐる争いをして、多数のフィンランド人をこの地へ拉致抑留してきたそうです。その時の建物がラーゲル（収容所）でありました。板壁ははがされ、ひどい廃屋状態でした。そこへ集成第十三大隊千五百人ほどの我々が詰め込まれたのです。学校の講堂のような広さで、中央に通路を作り、両側に二段の棚を作りました。建物中央にレンガ積みみのペーチカを作りました。一般部隊は二階には古参兵や指揮班が陣取り、下級兵や新兵たちは下の段です。二階部分は暖気があがって割合暖かいのに、下段は枕元の水筒が凍るほどでした。畳二枚ほどの広さに六、七人が横たわるぐらいのひどい寿司詰め状態でした。

その前日十月一日には、炭鉱町の北側に別の日本兵が千五百人くらい到着しています。こんな小さな炭鉱町に、突然三千人の日本人が来たのです。町には受け入れ体制など全くありません。水はすべてが凍ってラーゲルの中には自由に使える水な

ど一滴もありませんでした。

こわれた建物の外壁には板を打ち付けて、応急の処置はしていききましたが、隙間だらけで寒さを防ぐことなどできるはずがありませんでした。

新京のころは、武器は一応取り上げてしまったといっても、軍の組織をそのまま保っている日本軍の中へソ連兵が入って来ることはありませんでした。しかし、ここまで来れば、彼らにしてみればこちらの物、たちまちソ連兵の略奪が始まりました。持ち物検査と称して、銃器で我々を脅しながらラーゲル内の日本人をすべて表に並ばせ、建物内の荷物を徹底的に荒らし回るのでした。外では周囲を機関銃で囲み、我々が手にしている荷物を虱つぶしに調べて目ぼしい物を取り上げるのです。まさに強盗そのものの略奪行為でした。大隊として持っていた医薬品なども徹底的に取り上げられました。残ったのは消毒用リパノールと、浣腸用二酸化マンガン液だけというひどさでした。現地ソ連側には医薬品などが全くなく、町の住民用に



我々の医薬品を略奪したのです。これでは大隊として医務室を作っても機能しませんし、炊事室を作っても、食料が全く支給されない状態でした。

私も荷物検査で歯磨き粉（半練り）が見つけれませんでした。匂いをかぐと少し良い香りがします。

これは何だと身振りで聞いてきましたから、腹痛のまねをして、これを飲むとニッコリする……と答えると、ソ連兵は喜んで持つて行ってしまいました。ざまあみろ、腹痛で歯磨き粉を飲むロスケがいるぞと笑ったものでした。歯磨き粉など持つていても口をすすぐ水さえないので。ささやかな抵抗でした。

ブカチャチャは炭鉱町、驚くほど良質の石炭を産出していました。北九州の炭鉱にいたという兵士が、こんな良い石炭を見たことがないと言っていました。おそらく製鉄用の石炭だったのでしょう。我々が着いたころの産出量は一日に僅か数百トンであつたらしく、至急生産量を増やせというのが、炭鉱側に課せられた国からの至上課題であ

つたと思います。少しラゲル内が落ち着いてきたころから、私たちは炭鉱作業に借り出されることになっていきました。

#### 六 飢えと寒さ

日に日に寒さは厳しくなっていきました。関東軍の衣服は、零下三〇度くらいを目安にしていたものです。私たちの靴は、裏にウサギなどの毛皮をはって、一応防寒用となっていました。外側の皮には縫い目があるので。零下四〇度近くになつてくると、針の穴から入った寒気が皮膚を突き破るのです。恐ろしい凍傷、痛くて歩けなくなってしまうのです。防寒外套なども石炭積み込み作業でボロボロになっていきました。代わりの外套などありません。ソ連人がはいているカートンキというフェルト状の靴は、羊毛などの厚い一枚の布地からプレスしてあり、縫い目などはない物で寒さが侵入しないようになっていました。

私たち士官候補生はウンケルと呼ばれていました。若い人の意味で、石炭積み込みという屋外作

業を割り当てられました。坑内は重労働だからという趣旨だったらしいのですが、実は寒さになれない日本人にとっては、厳しい寒さの中の屋外作業の方がまだはるかに重労働でした。ソ連では、零下三〇度を下回ると屋外作業は危険とされ、中止される決まりとなっていたようですが、炭鉱が動き石炭を出てくるからには、積み込み作業に中止はありません。十月が過ぎ、十一月も半ばを過ぎると、猛烈な寒気に襲われはじめました。

食料の不足は絶望的なものでした。炭鉱へ着いた当初は、満州から持ってきた食料が多少あったのですが、間もなくそれも底をつきました。私たちは鉛筆などをソ連人のおばちゃんたちと交換して、馬鈴薯などを僅かに手に入れることなども覚ええました。しかし、交換割合は日に日に低下、半月もすると当初の半分ほどの量しか得られません。目ぼしい交換物資は既にソ連兵に略奪されてしまい、僅かしか残っていません。大隊本部は必死になってソ連側と食料確保を交渉していた

ようですが、ソ連自体に食料がないのです。ここはシベリア本線の駅（カガノビッチ）から単線で北へ六十キロ、湿地帯のため線路はデコボコで危険極まりない状態でしたから、石炭輸送が最優先の鉄道では、現地ソ連人の物資確保に手いっぱいだったのです。日本人抑留者に物資を運ぶ余力はなく、また物資そのものが絶望的に不足していたのです。

候補生の間に、ついに最初の犠牲者ができました。石炭は斜めに掘られた坑道に沿い、地下数百メートルからつるべ式の炭車に積まれて引き上げられます。線路沿いの所にブンケルと呼ぶ、数十トンに入る大きな鉄板製のじょうご状の器があり、その上で炭車がひっくり返って石炭を落とす構造でした。石炭はブンケルの下に開閉式の出口があり、リユークという大きな雨どい状の鉄板上を流し、貨車の窓から積み込む方式でした。八時間の作業中、何回かは長い鉄棒でブンケルの内側をついて、凍りついた石炭を鉄板から落とす作業が必要

でした。ブンケルは大きな建物に包まれており、鉄はしごを伝わって上っていく。地下からあがってくる石炭は暖かく、部屋の中はさほど寒くはありませんが、石炭の湿気は足元の鉄板通路に凍りつき、非常に滑りやすくなっていました。

昭和二十年十二月二十七日の夜半でした。ブンケルが詰まったというところで、いつものように一人の仲間が上がっていきました。ところが、しばらくして、リュークから防寒帽が出てきたのです。日本人のものです。しかも湿っている……血のおいででした。ソ連人監督に知らせると真っ青になって、電話ですぐ炭車が上がってくるのを止めました。ブンケルの部屋を調べに行った仲間が、誰もいないと叫んでいました。最悪の事態でした。靴の底はコチコチに凍り、滑りやすくなっています。鉄棒でブンケルの壁をついている中に、誤って滑り落ちたのです。

直ちに石炭をすべて線路上に流し落としていきましました。間もなく顔形の見分けもできない無残な

友人の頭が出てきました。炭車は約四トン積み、ブンケルに滑り落ちた友人は、石炭に何度も直撃されて即死だったでしょう。体中の骨が砕けてしまった余りにも無残な死でした。わずか一年前には希望に燃えて海を渡ってきた私たちでした。こんな所で無意味な死を迎えるとは、まだ十八にもなっていないかった友人の死でした。

極端な飢えの日々が続きました。一日に僅かの黒パン、手のひら半分にも満たない量です。それとスープと称する「塩水!」、飯ごうの底に大豆が二粒か三粒、体が保つはずがありません。夜間の気温は零下四〇度を下回るようになってきました。それでも作業は続くのです。私たちの隊長は若い候補生を守るのに必死でした。

水は一切ありません。ラーゲル内にスチーム配管の端末が井戸の中に覗いていました。さびた鉄管から僅かの水が湯気と共に出ているのです。金気が多く飲めたものではありませんでしたが、そんな水ですら貴重なものでした。

メガネなど全く用をなしません。吐く息の水蒸気がレンズにまっ白に凍りつき霜となりました。硬く凍りついた霜はこすつても取れません。瞬きをすると、上下の睫毛が凍りつき、目が開けられなくなる有様でした。

炭鉱のボイラーから出る煙突の煙は、まっすぐに昇り上空で四方にたなびいていきました。全くの無風状態、蒸気機関車の出す音までが冷たくなり響き渡りました。鳥など全く姿を見せず、わずかにスズメだけが民家の煙突の近くに体中の毛を逆立てて軒下に丸くなってじっとしていました。天も地も凍りついた世界でした。

太陽が顔を出すのは十時すぎ、南のやや東寄りから顔をのぞかせ、そのまま西側に移動、二時ころには日没、北緯五五度三〇分の冬の太陽でした。日中明るくなることはありませんでした。

#### 七 栄養失調

十二月末ころから、ラーゲル内ではほとんどの人が栄養失調の状態になっていました。体を維持

するだけの食料がなく、八月に軍官学校を出陣以來、一度も入浴せず、着替えしたこともないという極度の不衛生、体がおかしくなるのは当然であったのです。ソ連側に見ると、受け入れ設備など全然ない小さなブカチャチャ村に、いきなり三千人も人口が流れ込んだのですから、ソ連側でも手の打ちようがないというのが実態だったでしょう。

スターリン絶対の時代、石炭産出量を増やせ、ただそれだけの命令があり、住まい、食料、衣類、衛生設備など一切何の準備もなかったのですから、飢えと極度の寒さの中で、恐ろしい結果が当然のようにあらわれてきたのです。

アフリカの難民がTV放映される事があります。子供たちの顔は目ばかりギョロギョロと光り、頬はこけて骸骨が皮をかぶっているようです。細い腕も脚も関節ばかりが目立ち、あとは細い骨ばかりで立っている哀れな姿です。私たちがもういう姿になっていたのでしょうか。

健康診断は五級に分かれ、一級（ピエロイ）は一番軽い症状とされるが、肋骨はむき出しになり、尻の肉はありません。立った人の後ろ姿を見たとき、肛門は絶対に見えません。一級になると肛門が丸見えとなり、そこから皮膚の皺が放射状に走り、腰の骨に皮膚がひっかかっている状態です。筋肉の脂肪もすべてカロリーとして消耗され、尻の肉はほとんどなく、骨に皮をかぶせた状態になっていました。それでも何とか立っていられるならば一級です。作業に適する体なのです。

二級（フタロイ）になると立っているのが困難となります。三級（ツリーツチ）は、もはや全く立えず横たわっているだけで、あれほど飢えた時なのに、どんな食物も受け付けなくなって、ただ死を待つだけの状態です。胃腸の機能を全く失ってしまうのです。

ラーゲルの中の日本人はほとんど栄養失調になっていきました。それでもソ連側は炭鉱作業に出ることを強制していたのです。「国際法に従って、

週に一日は休暇を与える。収容人数の七分の一には栄養を与える。従って千五百人の七分の六は毎日作業に出せ。」ソ連側の絶対的な命令に大隊本部は毎日苦悩していたのです。もともと、本部、医務室、炊事場などの人数はかなりの数です。七分の一に近い数字が間接人員として取られているのです。一般部隊の兵士には減多に休みがないのです。悲劇的な事は八月一日の兵士でした。老兵の上、作業から帰ってくる、古参兵の靴の手入れまでやらされていました。たまに回ってくる休みの人数は古参兵たちが取ってしまい、八月一日の兵士には休養の日はないのです。関東軍の主力は沖繩やフィリピン方面へ抜けてしまい、北支から一部の日本軍が満州へ回されてきていました。集成第十三大隊の中心は、北支からの転戦部隊が実権を握っていたのです。旧日本軍の悪弊がそのままシベリアに持ち込まれていた事が悲劇に輪をかける結果になっていきました。

## 八 虱の発生

恐るべきことが起きました。ついに虱が発生したのです。ナポレオンがロシア中枢部にまで侵入しながら敗れたのは、「冬將軍」といわれたロシアの寒さ、虱による「発疹チフス」の大発生によるものでした。先の大戦の時もドイツ軍はレンングラードやスターリンググラードの近くまで攻め込みながら、ソ連軍に敗れたのも、ナポレオンの時と同様でした。数千キロに長く伸びた物資の補給路線は、侵入者に抵抗する民衆の反抗（バルチザン）に遭って、弾薬も食料もドイツ軍には届かなくなっていたのです。ナポレオンもドイツ軍も、寒さと飢えと発疹チフスの高熱で壊滅したのです。ぎゅうぎゅうに詰め込まれた状態で横たわっている私達の間にも、虱が伝染していくのは瞬く間でした。発疹チフスは三九度、四〇度の高熱が幾日も続きます。リバノールと二酸化マンガンしかない医務室では、手の打ち用がありませんでした。高熱が一週間も続くと、脳が冒されて発狂する者が出始めました。栄養失調でやせ細った体で、

脳症に苦しみ悶え、大声でわめきながら体力を消耗し尽くして、急に静かになって終わりでした。ラーゲルの中は悶え苦しむ声に満たされていきま

した。ソ連兵は病気がうつるのを恐れ、略奪のためにラーゲル内に入ってこなくなりました。作業に出れる人数が急速に減っていきました。ソ連司令部はついに作業の中止を命じてきました。ソ連人に虱や発疹チフスが伝染するのを恐れたのです。昭和二十一年の一月半ばの事でした。大惨事の始まりでした。

一月の末ごろであったと思います。夜半の気温は零下五五度を下回りました。作業は中止されたままでした。何の対策も講じないのですから、発疹チフスはますます猖獗しょうけつを極めていきました。ラーゲルの中では、朝になっても目を開けない者が次々と出ていました。

私たちの仲間も次々と倒れていきました。「おい、今S君がだめだ」「I君も逝ったぞ」凄惨な

光景でした。

○君は枕許にいたT君に何かを懸命に訴えていたそうです。初めTには何のことか分からなかったのですが、○君の真剣な目と必死になって伝えようとする仕草から、○が枕の下から何かをと望んでいるのが分かり、彼の雑嚢を調べて、それが剃刀の刃であることにTは驚愕したのです。○君はそれを自分の右手に持たせる様に要求しているのです。もちろん持たせることはできません。○の鋭い眼光は、とても言葉では言い表せないほど凄惨なものだったとT君は言っています。柔和な○君の姿からは想像もできないほどのものだったようです。恐れをなしたTは傍らにあった木片を彼の手に握らせました。○君は途端に安らかな表情になり、左手首の内側を、その右手に持った木片でゆっくりと何度も何度も押し付けて、その口の動きから「俺は自分で死ぬ、自分で死ぬんだ」と言っているのが分かったそうです。徳島一中創立以来の秀才と言われた○君の余りにも悲しい最

後でした。T君は「貴様は」「貴様は」と何回も叫んで泣いたといえます。後でT君は言っています。「○君の死は病死ではない。あれは自決したのだ。」まだ十八歳にもならぬ若者の死でした。日に日にラーゲルの中は、阿鼻叫喚まさに地獄の様相を呈していきました。

ソ連は対策として、入浴を命じてきました。狭い町の浴場（バーニヤ）はソ連人の入浴だけで余裕はなかったはずでしたが、このままでは日本人の労働力が限りなく減っていくのを恐れたのでしよう。また、いつかはソ連人の間に病気がうつっていくのを恐れたのです。

どんな無理なやりとりをしたのか、ソ連人の入浴は昼間のみとして、夜中に日本人の入浴が始まりました。バーニヤとは蒸し風呂でした。入り口で小さな手桶一杯のお湯（実際には水）を受け取り、浴場の中は木製の階段式で、そこへ座って蒸気の中で汗をかき、手桶の水で体をこすって垢を落とせというやり方です。その間に衣服は一人一

人分を針金で束ねて、熱気室に吊るし、虱を殺すのです。しかし、あまりにぎゅうぎゅうに縛って衣服を熱気室に押し込みますから、衣服の中まで熱が伝わらず、生き残る虱がたくさんいる始末でした。それでも入らないよりはましということだったのでしょうか。

夜間の入浴ということは、一時間ごとにラーゲルから入浴者が出発します。ソ連式の計画経済では、何時間に何人が入浴できて、何日かで日本人の入浴は一巡する？ はずでした。しかし、実際には古参兵たちは、坂道を下って二キロ以上も離れた、駅の近くのバーニヤまで行くのをきらいしました。栄養失調でふらふらしているのに、作業をしてラーゲルにもどり、夜中にはまた入浴などできるか……という理屈でした。帰ってくる時は登り道、大変なことです。ソ連側には今夜は何人入浴させるというノルマがありますから、バーニヤ行きの人数はやかましく命令してきました。古参兵たちの中には、バーニヤから戻った八月一日の

新兵たちを、もう一度入浴行きのグループに押し込んで、自分たちはサボる者がおりました。きちんと入浴しておれば、十日もあれば日本兵は全員が一巡したはず、しかし虱はサッパリ減りませんでした。ラーゲル内は相変わらず高熱に苦しむ呻き声に満たされておりました。

#### 九 私の入院

司令部前の温度計は零下五五度を記録しました。冷たく沈んだ空気がジーンと音を立てるような気がしました。二月初めだったでしょうか、私がラーゲル内をフラフラ歩いていると、急に腹が痛み出し、ヌルリと便が出てしまいました。止めようと思っても止まりません。ズボンを下ろしてみると、半透明の粘液のような便でした。僅かに臭いがしていました。着替えがあるわけでもなし、仮に着替えがあったとしても、洗濯などできないのです。体の熱で自然に乾いてくるのを待つしかないのです。まともな食物が長く胃腸の中に入っていないと、胃腸はだんだんと機能を失い、粘膜



が剥げ落ちてくるそうです。末期症状でした。

体がグラグラしたと思うと、私は地面に崩れ落ちました。凍った雪に泥を被った地面は固く、零下数十度の冷たさだったでしょうが、不思議と暖かく感じられました。これで作業に出なくてすむだろう。明日から休める。何か嬉しいような気分になっていました。幸せな気分でした。いつの間にか気を失っていたようです。

気が付くと病院の廊下にうずくまっております。朝になればどこかが空くのです。毛布一枚と小さな雑嚢、たしかに自分の全財産でした。七期生の誰かが私を病院まで運んでくれたのでしょうか。それが誰かは分かりません。あのまま地面に放置されていたら、一時間も経たぬうちに凍死していたでしょう。

病院ではやっと私の番が来て、はいつくばって空いている場所へ倒れこみました。嬉しい気持ちになったのを記憶しています。その後のことは全く覚えておりません。

幾日か経って、気がついた時には四人部屋に寝かされていました。重症者の部屋でした。軍医から君は胃腸が強かったから助かったのだよと言われました。それから幾日かたって、おかゆのような食事を支給され、私は日に日に回復していきました。危機は脱したのです。

ある日、衛生兵から、君は元気になったのだ。部屋の掃除でもして、だんだんと体に力をつけなさいといわれました。好意から出た言葉で、喜んで私は承知しました。その人が木製の桶に水を入れて、部屋の外に置いてくれました。私は桶を中へ入れようと、持ち上げようとしたのですが、どうしても上がらないのです。そんなバカなど、いくら頑張っても駄目でした。君は助かったのだと言われても、まだそんな状態だったのです。思わず涙が出たのを覚えています。

私が医師から言われたのは栄養失調二級でした。骨と皮だけのどんな惨めな姿をしていたのでしょうか、今考えても寒気がします。友人や医師、衛

生兵のお陰で、葉はなくても私は助かったのです。

#### 十 栄養失調の死

ある日、隣のベッドに豊橋の兵士が入院してきました。体が弱く、ずっと召集されずにきたのですが、昭和十九年の秋に地元連隊に入営、満州に来たそうです。妹さんが手編みのセーターを送ってきてくれたそうで、あたたかそうなセーターを手で触って、豊橋の家のことを思い出しているようでした。家業はさつま揚げなど水産練り製品を扱っているようで、さつま揚げとは魚肉を練り上げてから、昆布や人参などのみじん切りを混ぜ、油で揚げるのですが、少し塩味がつけてあり、揚げたてを食うのがとてもおいしいのだというような話をしてくれました。その人は栄養失調二級というより三級に近い危険な状態に見えました。弱々しい声ながら、妹さんが編み物が得意なのかとか、いろいろな話の内容は混乱していなかったように思います。

ある朝、その人は目を覚ましませんでした。襟

首からぞろぞろと虱が湧き出ておりました。死んだのです。病院にはスチームが通っているとはいえ、枕元の水筒の水が凍ることがあるくらいで、死者の体は瞬く間に冷えて、虱がすめなくなって湧き出るようになってくるのです。栄養失調の死は静かでした。ロウソクが燃え尽きるように命の灯火が消えるのです。私はその人を哀れとは思いませんでした。それよりも衛生兵に頼んで、あのセーターをもらいたいなどと考えておりました。私自身、危機を脱したとはいえ、もはや人間らしい感覚を持っていなかったのです。

代わりに入ってきたのは、柄の悪い古参上等兵でした。普通の兵役義務は二年間で、それがすめば除隊できます。しかし、民間の暮らしに戻っても、まともな生活ができない兵士が大勢いたので、彼らは故郷へ帰るより、そのまま軍隊に残って、古参兵として威張って暮らした方がよいとする人たちが少なからずいたのです。彼らには上等兵から伍長、軍曹と、下士官として出世する道も

あつたのです。

しかし、中には年数の関係で上等兵までにはなつたものの、一般兵への暴行やら、博打やら悪いことばかりするので、それ以上、階級が上げられないという連中がおりました。彼らは「万年上等兵」といわれ、軍の内部では、厄介な存在でした。入浴も当然サボっていたのでしよう。

しかし、一般兵士の飯を取り上げて自分だけが食うわけにもいかず、さすがの彼も栄養失調になつてしまつたわけです。

ある晩遅く、二番方の兵士が彼を見舞いにやつてきました。二番方とは夕方四時から夜半の十二時までの仕事です。正門を通つて、ラーゲルへ向かう途中に病院があり、見舞いに寄つたのです。夜中のこととて、衛生兵の見回りもなく、安心して古参兵のご機嫌伺いができるのです。ごますりをしておけば、彼が退院してきた時、具合がよいという狙いでしよう。兵士はソ連人作業者から、タバコを一本もらつたからといって、土産に持つ

てきたのです。パピロスという吸い口の長い、高級なタバコでした。もう長いことタバコなど誰も吸っていません。古参兵は大喜びでタバコを口にくわえ、火打ち石で火をつけました。「うめえなあ。」低く呻くような声でした。そしてタバコを持つた右手がスーッと伸びて、ダラリと下へ垂れ下りました。タバコはぼとりと床へ落ちました。心臓が停まつたのです。栄養失調の体にはタバコは危険だと分かつていたのに、彼は我慢できなかつたのでしよう。そして命を失つたのです。見舞いの兵士は慌ててタバコの煙を両手で振り払い、吸殻も拾つて、俺のことは絶対内緒にしておいてくれと、私に何回も何回も頼みながら、アタフタと部屋を出て行きました。これも栄養失調の死だつたのです。

#### 十一 一本松の悲劇

私は順調に回復していきました。柔らかい食べ物、栄養を吸収する力がまだ胃腸に残っていたからでしよう。間もなく水のはいった桶を部屋の中

へ入れることもできるようになり、雑巾をしぼる力も出てきました。危機を脱したのです。昭和二十一年四月の末ごろになっていたでしょうか。昼間は軒先のツララから雫がたれるようになってきたころ、元の候補生の部隊ではなく、軽作業を中心とするOK（オカ）という部隊に戻っていくことができました。

厳冬期には一日に二十人を越える死者が出ていました。死者の衣服はすべて剥がし、手首などに布切れを結び名前を書いて、テント小屋の中の棚に並べてありました。死者への尊厳などを配慮することなどひとかけらもありませんでした。交代で遺体埋葬に出るのですが、作業に疲れて帰ってきた者が、再び墓堀作業に駆り出されたのです。

零下四〇度を越える寒さでは、雪も土も固くてそのままでは掘れません。炭鉞から帰ってくる人たちが塊炭（石炭の塊）を担いできて、人一人分くらいの長方形に石炭を積み上げていきます。角を少し砕いて、木屑や枯れ草をおき、カンテラで

火をつけると、意外と簡単に燃え出すのです。それほど質の良い石炭でした。一晚チヨロチヨロと燃え続けると、その場所だけは三十センチほどは掘れたのです。雪と泥をかき分けた程度の穴で、遺体をすつかり埋葬するには無理なのですが、そこへ遺体を横たえ泥をかける程度の惨状でした。

しかし、その程度の作業では増え続ける死者の埋葬は間に合いません。OKの私たちには遺体埋葬が主な仕事になっていきました。テント小屋に収容しきれない遺体は外に放置されていました。魚河岸の冷凍マグロそっくりの惨状でした。

遺体は台車に積み上げ、毛布を何枚かかけて、ロープで縛ってラーゲル北側の門を出て、鉄条網の扉に沿って、左周りにラーゲルの裏へ回りしました。途中で遺体がロープからすべり落ち、にぶい音を立てて凍った地面に落ちました。私たちは無表情に裏の丘へ向かいました。ラーゲル南側の柵の直ぐ傍らに一本の松が立っており、その直ぐ右側から遺体を埋葬していきました。土盛りの数は

一列二列と数を増していき、いつの間にか私たちは墓地のことを「一本松」と呼ぶようになっていました。明日は我が身の恐怖の言葉でした。

埋葬を終えた私たちは、台車をひいて、食糧の受領に倉庫へ向かいました。付添いのソ連兵が伝票のようなものを示して穀物、大豆、いも、凍った野菜などを倉庫のソ連人から受け取りました。私たちの楽しみは、スコップなどでバターの塊や、凍った肉や魚の干物を叩き割って、外套の裏を破いて作った物入れに隠し持つてくる事でした。ソ連兵にとって、それは管轄外のこと知らん顔をしているのが常で、時には少しお裾分けにバターなどを渡してやりました。日本人が盗んだものから、彼らの罪ではないのです。台車に積んだ食料には、遺体を覆ったあの毛布をかけ、車を黙々と押している私たちは普通の感覚ではなかったのです。

五月の末ごろから氷が解け出しました。六月、チロチロと青い火がふき出しました。遺体の骨か

ら出る燐が燃えるのです。暗くなるのは夜十一時過ぎ、薄暗くなった一本松の丘に燃える青い火、一生忘れることのない凄惨な光景でした。

五月から六月にかけて、アミーバ赤痢が流行し始めました。それがやっと納まったころ、三千人はいたはずのブカチャチャの日本兵は千六百人ほどになっていました。死者が多かったこと、重病人をシベリア本線沿いの病院などへ転送してしまつたことなどによるものでした。七期生は転院先で亡くなった者を含めると、ブカに入った二百三十人の内、百人近くが亡くなっています。一般の部隊に比して死者はいくらか少なかつたといえるでしょうが、苦しい中でもお互いに助け合う気持ちがあつたからでしょう。倒れた私を病院へ運んでくれたのは誰か分かりませんが、その行為が私を救つたのです。イルクーツクへ行つた八十人は、作業は鉄道建設等、きつい仕事だったので、死者僅か三人、建物、衣服、食料などが大都会に近かつた故に、しっかりとしていたからでしょう。

昭和二十一年の七月ころは、やっとラーゲル内が安定してきたようでした。ラーゲル内は草一本生えていませんでした。栄養源として根っこごと抜いてペーチカで煮て食ってしまうからです。草は大切な栄養源だったので。作業に行った先で青々とした草をみつけた人が持って帰り、大喜びで湯がいて食べたら下痢！ ゲンノシヨウコという薬草だったなどという笑い話もありました。

私は七月ころ、やっと七期生の部隊に戻り、石炭積み込み作業に出て行くようになりました。

シベリア全土に数多くあった日本人収容所の中で、ブカチャチャは最も悲惨な運命をたどったラーゲルの一つだったので。

## 十二 思想改造

その後はソ連側も余りの惨状に驚いたのでしよう。入浴、衣服の交換などの衛生管理が行われるようになり、食料などの補給も整ってきて、死者はほとんど出なくなっていきました。暖かくなつて、虱の発生も減り、食事も食堂でするようにな

っていきました。

次の段階として、ソ連は共産主義を謳歌する思想的な洗脳教育を計画的に図りました。第一段階として演芸場を作り、素人演芸界のような娯楽などを認めるようになっていきました。衛生兵の人が女形で、うどん粉で白い化粧をして、湯島の白梅などの新派演劇などを上演し始め、劇団員には特別待遇が与えられていました。先ず中途半端な社会改良主義者を表面に出してのさばらせ、その発展段階として階級意識？ を目覚めさせるように、新聞等で一般兵士たちを教育する。ソ連共産党小史に則ったカリキュラムが組まれていたのです。シベリア全土の日本人ラーゲルにほとんど同じ動きが見られました。目ぼしい人間をチタの袴田学校という教育組織に送って洗脳し、戻ってきたら、彼らをリーダーとして社会改良主義者を放逐させて……筋書きができていたのです。

日本新聞という新聞が配られるようになってきました。偉大なる同志スターリンの偉業を讃え、

資本主義社会がいかに間違っているかを教え、日本人の歴史認識を根底から変えてしまおうという、マインド・コントロールを策したのです。活字に飢えていた私たちはまだ十八〜十九歳の若者でした。新聞を貪るように回し読みしていきましました。

呆れたのは、汽船を世界最初に発明したのはソ連人、初めて空を飛んだのもソ連人、ラジオを発明したのも……何だ、これはという感じでした。

日本の天皇制の誤りなどもくどくどと書かれていました。○○天皇の妾は何人いたとか、徳川第○代將軍××に側室が何人、生まれた子供はすべて痴呆！ 何とも奇妙な歴史でした。日本の歴史に嫌悪感を持たせようと意図したものでしょう。

生活もやや落ち着いてきて、ロシア語も多少聞き取れるようになってきて、ソ連社会が変わっているのに気がついておりました。ブカチャチャは実は囚人の町だったのです。少々変わっているのは、刑期がすんだソ連人も一緒に住んでいることです。またすべてが囚人でもないのです。彼らが

語るのに、電信柱に小便をひっかけたら、国有財産をけがした罪でシベリア送り、酒場で酔って喧嘩をしたらシベリア送り……ささいな罪でシベリアに送られて来た人たちが大勢いたのです。まあ、上品な人たちではないのですが、個人的には、そう悪人でもないようです。彼らが最も気を許して話ができしたのは、皮肉なことに日本人に対してでした。ソ連人同士は決して本音の話をしていない、むしろできない雰囲気なのです。釣りだとか、鉄砲撃ちの成果だとか、酒の失敗談とか、女の話とか、お互いに当たり障りのないことしか話していないのです。密告を恐れていたからです。お互いに相手を疑っていたのです。立ち小便したらシベリア送りとはなにごとだなどと、政府の決定に文句を言ったことがばれたら大変です。さらに極北の地の果てに送られてしまうかも知れないのでしよう。

ソ連はこの良質の石炭を掘るために、自国民を捕まえてシベリアへ送り込んでいたといっ

いでしよう。フィンランドの兵士たちも同じ理由で連れてこられたのでしよう。日本人もまた開発に利用しなかったから、国際法も何もあったものではない強制連行、拉致抑留をしたのです。

軍隊の中にも青い色の帽子を被った将校がおりました。政治部といわれていたようですが、彼らが軍内部の共産党監視組織の一員だったようです。同じ階級でも青帽子が絶対的な力を持っていたようです。そして、彼らが嫌われていたことも確かでした。

共産党主導の国とは、強烈な権限を握った官僚組織が国を支配しているのと同じです。極端な縦割り社会でした。石炭積み込みをしている私たちにくつついてきたソ連兵が、あそこの線路に入っている列車の何番目の車両にはサケが積んであるなどと教えにきました。貨車についている伝票を讀んで教えにくるのです。盗んでこい、そして俺に分け前をよこせということでした。彼らは鉄道に貨物には何の責任もないわけで、盗まれようが、

火をつけようが、関係ないことです。積み込み現場には連れてきた日本人を無事にまたラーゲルへ連れて帰れば、警戒兵としての任務終了、サケのお土産歓迎となるわけです。理解しがたいソ連という国の実態でした。

### 十三 造船の町 カクイ

昭和二十一年はようやく終わろうとしていました。二回目の冬で、だいぶ慣れていましたから、さほど犠牲者は出ませんでした。

鵜飼がヒロクへ送られると聞いたのは、二十二年の三月ごろだったでしょう。軍官学校では彼と私は同室で、シベリアから先に帰った者が、仲間の家族へ誰それは無事であることを連絡しようという所を教えあっていたのです。

おう、貴様の所は東京都仲蒲田「父：飯島岩雄」だったな。書いたものは見つかると危ないぞという話を聞いていましたから、みな暗記していたのです。愛知県春日井郡坂下町字西尾「父：鵜飼庄市」だったな。お互いに確認しあっておりました。



私はとつくに原隊復帰できたというのに、鵜飼はずっと病院暮らしでした。栄養失調は、普通やせているのに、彼はむしろむくんだような感じで、やせるより危険な体調だったのです。内臓器官の異常を意味していたからです。

私が炭積み三番方の時だったでしょう。朝、炭鉱から帰ってきて一眠りした後でした。ヒロク行きの病人が出ると聞いて、急いで正門の所へ行きました。

病人十数人が正門の手前に並んでいました。衛生兵の鈴木さんが付き添っていました。鵜飼と話をしたかったのですが、ソ連兵に邪魔されて話できませんでした。三月になっていましたから、さほど寒くはなかったと思います。鵜飼は防寒帽の垂れを上げておりました。私に気がついて、仲間蒲田だったなあと叫びました。私は指で三と十六と五を示してやりました。彼は大きくうなずきました。病人の列は正門を出て、少し下る感じの道をゆらゆらしながら歩いていき、数百メートル先

を駅へ向かって右へ曲がり、それが鵜飼を見た最後でした。

翌月、私はブカチャチャの分所のようなカクイの造船所へ転属となりました。候補生の死亡者が多く、少しでも軽い仕事へつけられないかと大隊本部は以前より考えていたようです。造船所で製図をやっていた若者が、町のカムサモール（青年共産党）の書記として、党務に専念するため、製図ができる日本人はいないかと、探していたようです。私は工業・機械科出身で、他にもう一人いましたが、身体検査で彼は落ちました。容貌がジヤイアント馬場よろしくのごつつい感じの男で、私の方が弱々しく見えたからでしょう。彼は落第したのです。

数十年もあとのこと、復員して工業系大学を出た彼は、商社に入って東欧共産圏へのプラント輸出の専門家として大活躍をします。しかし、我々の会合で顔を合わせたときは「俺は合格、貴様は落第」といって大笑いしたものです。

転勤は五十トン石炭車の上に乗っていきました。電気工、左官屋さん、大工さんなど技術屋十数人の小さな集団でカクイに向かったのです。

単線六十キロほどを南へ下ってカガノビツチへ出て、シベリア本線を西へ数十キロ、また支線を南へ下って間もなくのシルカ河に沿った造船所だけの街がカクイでした。二十キロほど南にスレテンスクという大きな町があり、そこでアムール本流と合流するのです。黒竜江を走る河船を作っている街でした。ブカチャチャと異なる点は、一般人の町だったということです。囚人の町ではないのです。また石炭とは異なり、船という技術集積の仕事でもあったという点です。

そこでもいろいろな体験をすることとなりましたが、造船所の現場管理事務所のような所で周りはソ連人、それもヨーロッパ系の人間が多く、髪の毛の黒いモンゴル系などは雑役・掃除婦くらいでした。

それまで製図関係の仕事をしていたのは、若い

青年シロコフでした。彼が町の青年共産党（カムサモール）書記として党務に専念することとなり、代わりの製図工を日本人の中から探していたのです。それでもシロコフは工場に籍があるらしく、たびたび事務所に顔を出していました。

正式の名は「シロコフ イワン ゲラシモビツチ」といい、イワン家のゲラシモフの息子、固有の名はシロコフということになります。彼から仕事の内容を引き継ぎました。そして私が何か図面を書いたとしても、それにシロコフが署名して提出することになっていました。事務所の正式名称は「カントラ・エモー」といい、「エレキトロ・ミハニチエスキー・アジオ」の略で、直訳すると「電気・機械事務所」工場の重要部署の責任者がデスクをおいていました。事務所や工場内で私の行動は自由、ただし本部建物へ行ってはならないとされました。私が何か図面を書いても、シロコフが署名して課長に提出する。私が工場の中へ入るときは、言葉がまだ不自由だから、若い娘リュ

ーシャが同行するなどが決まりました。実質監視役を兼ねていたのでしょうか。

直属課長はアブローシキン・アレキサンドル・イワノビッチといい温厚な感じの人でした。しかし、現場でこわれた機械の部品の寸法を測って図面にしたくても、コンパスがありません。アブローシキンに言っても、フリーハンドで描けばいいさという返事、シロコフがコンパスを持っていてしまつたようです。彼はカムサモール、正式の共産党員の一步手前、課長は彼に遠慮しているような感じでした。

また、エモーにいたる人たちは、現場の人たちから、一目おかれているようでした。とにかくソ連人ばかりの所へ私一人が飛び込んだわけです。リユーシャは短大ぐらいを出ているらしく、片言の英語が通じました。私の方もかなり怪しい英語ですから、二人は奇妙な英会話で現実を歩き回ることとなったのです。

仕事は現場から何か壊れたなどと連絡がはいる

と、すぐ行って部品の寸法などを測り、フリーハンドの図に描いて課長に提出、それだけの仕事で図面一枚の手数料はかなり高かったようです。それがカントーラ・エモーの売り上げとなるのでしようが、そのうち何割かが私の仕事への報酬となつていくのでしょうか。簡単な図面一枚で五ルーブルくらいにはなつていたようですから、日に二十ルーブルくらいを稼ぐのは楽でした。だんだん仕事や雰囲気に慣れてきて、私の収入はラーゲルでNo 2 になつていきました。

No 1 は時計の修理屋さん、真鍮の薄板を叩いて歯車を切り出すようなことまでやって、仕事をしておりました。元、大手の時計メーカーにいたとか、ラーゲルの中に仕事場を持ち、ソ連人が持ち込んでくる時計の修理を断るのが大変というくらい繁盛していました。

そのころ、土を掘る仕事などをして一日数ルーブルの収入にしかならず、月に一五〇ルーブルが一人当たりのノルマでしたが、ラーゲル内で目

標値達成の人は僅かしかいなかったようです。目標を突破すると、何がしかの報奨金が私に支給されました。エモーの女の子に頼むと、バザールで何でも買ってきてくれました。私のシベリア生活の中で最も恵まれた時期でした。ロシア語の力は急速に伸びて、リユーシヤがついてこなくても、現場ソ連人と仕事の打ち合わせをするのに余り不自由にならないようになっていきました。

#### 十四 ノルマ

私の仕事は順調に進んでいるようにみえました。ある日、電話で現場に呼ばれました。フランジのボルトが折れたというのです。ボルトとナットを交換すればよいだけで、簡単な仕事でしたから、すぐ図面にしてアブローシキンの所へ持って行きました。ところが、温厚な課長が怒り出しました。「日本人がこんなにバカだとは思わなかった。」というのです。リユーシヤが説明してくれました。「ヒサシはボルトとナットを一枚の図面にしたからいけないのよ。」というのです。別々に描けば、

それぞれに手数料がついて、合計金額は一枚の図にした時より増えるというのです。エモーの収入だって減ってしまう。ヒサシのラーゲルに支払う金額だって減るから損じゃあないの。と言われました。

そのころ、スタハーノフ運動というのが盛んで、要は生産性向上運動でした。スタハーノフという炭鉱夫が仕事に工夫をして、石炭生産量を大幅に増やすことに成功したそうで、国民的英雄扱いでした。スターリンから直接褒章を授けられたそうで、大きなポスターやらビラやらを貼りだして、カクイの工場内でも大変な騒ぎをしていた時期でした。アブローシキンはヒサシにコスト意識がないんだ。だから日本人は負けたんだ。とプリプリしていました。

工場を見ていて、歯車の歯が欠けたなどという故障なら、その歯車をフライス盤の所へ持っていけば、直径と歯数をセットすれば、後は機械が削りだしてくれるはずです。何もエモーを通さなく

でもないはずです。リユーシヤに話したところ、絶対に課長にそんなことを言っただけはいけないと叱られました。エモ一の仕事が減ってしまつて大変よということです。現場の中で互いに連絡を取り合つて、直接仕事をするのは禁じられていたようです。必ずエモ一という上級管理機関の事務所を通さないといけないシステムになっていたので。リユーシヤに言われて、仕方なくアブローシキン課長には謝っておきました。しかし、どうみてもノルマのシステムには合点がゆかぬところがありました。

#### 十五 タバリシ

カクイでは、ブカチャチャでは経験しなかつたソ連の現実に触れることになっていきました。ある日、イワンと呼ばれているロシア人がエモ一の事務所へやってきました。町の共産党事務所に専従しているようで、特に仕事をしている様子はありませんでした。誰にでも「タバリシ」と呼びかけるのが口癖のようでした。タバリシとは「同志」

の意味で一番無難な言い方だったのでしよう。妙な言い方をして、資本主義的であるなどと難癖をつけられたら大変です。他の言い方には、親しい者同士の間で使う子供のところからの愛称が使われていました。親しい関係でないと使えませんから、普通は最も無難なタバリシとなるのでしよう。○「○ちゃん」といった感じが愛称でした。

イワンがある日、大変なミスをしました。私に對して「タバリシ・ヒサシ」と呼びかけたのです。私はヒサシと呼ばれていたのです。イワンはそれを知らずにうっかりタバリシを使つてしまつたのです。一人の男が立ち上がり、「ヒサシはタバリシと言えるであろうか。」と論争を吹つかけたのです。「同志」とは同じ志を持つ者、日本人であるヒサシが同志であるはずがないというのが、その男の主張でした。事務所の中は騒然となりました。別の男が「いや、ヒサシはファッシストが支配する環境に育ち、軍国主義者の道を選んだのである。彼の責任だけを追究するのは無理がある。」

と言つて、やや私を援護するような主張をする者もおりました。リューシャが私に目配せをしてきました。「雰囲気が悪いから外へ出てしまえ。」と言うのです。私は首を横に振りました。最後まで聞いてやろうとしたのです。

ここで驚いたことは、私の経歴をエモーの男たちが知っていたことでした。誰が軍官学校などの経歴を、ここへ伝えていたのでしょうか。ソ連を敵視する日本軍の中枢部のエリート将校になろうとしていた人物、それがヒサシだという視点です。政治的、思想的な難しい言葉はよく分かりませんでした。イワンの言動には賛否両論、決着はなかなかつきそうにありませんでした。

しかし、よく聞いていると、彼らは自分がいかに同志スターリンの言動に忠実な人間であるか、宣伝しているようなのです。スターリンは、第○回党大会において、これこれの主張をなさっていると、いや、第○回党大会ではこのように話しておられるとか、私は偉大なる同志スターリンの

言動をよく学習していると、自分の知識を吹聴しているのです。

ソ連は密告の社会です。いつ誰がどのような密告をするか分からず、お互いを信用していません。だから、私はスターリンに忠実であると、常に宣伝しておく必要があったのです。論争は、結果としてヒサシは同志とは呼べないこととなり、イワンは反省の弁を述べて、そそくさと事務所を出ていきました。その後、エモーの人たちが私への態度を変えたこともなく、いつもの通りでした。

#### 十六 掃除婦アーニャ

事務所には掃除をする若い娘がいました。小柄な東洋系の娘で、皆からアーニャと呼ばれ、可愛がられておりました。しかし、アーニャは私に対しては、打ち解けた態度を一切示しませんでした。私のデスク周辺の掃除などは綺麗にしてくれるのですが、話をするとは一切なかつたのです。

リューシャがある日、アーニャについて話をしてくれました。概略は以下のようです。

彼女は朝鮮人、名前は「アン」、戦時中、北朝鮮のある村の幹部の娘だったそうです。ある時、村を通過する日本軍が昼食をすることとなり、村全体をあげて湯茶などの接待をすることとなりました。彼女も父親に言われて役場の応接間で、日本軍幹部へ湯茶の接待を手伝ったそうです。その部隊は金匪（キンピ）討伐に出動していたようでした。金日成キムイルソンを首領とする反日ゲリラの掃討作戦をしていました。昼食など無事に済み、日本軍は機嫌よく村を出て行きました。

数日後、大変なことが起こったのです。部隊司令部から、アンを看護婦として採用するから、出頭させるようにと命令してきました。看護婦！その意味は歴然としていました。慰安婦なのです。しかし、命令に背けば、どんな報復を受けるかわかりません。似たようなことは朝鮮のあちこちで起きていたのです、アンをどこかへ逃がすようなことをすれば、村全体が焼き払われるかもしれない。アンは泣く泣く部隊司令部へ出頭したのです。

その後、部隊がどう動いたのかわかりませんが、彼女は部隊長の専属慰安婦として、部隊と行動を共にしていたようです。終戦の時、部隊は満州におりました。そして武装解除された後、シベリアへ入ったのです。日本人でない彼女は解放されるはずでしたが、アンは村へ帰れないと言って、ソ連の女性将校の保護の下にシベリアへ入ったらしいのです。彼女自身は何も悪くない、しかし、村全体が彼女のことを知っている。シベリア東部・北朝鮮との国境近くに大勢の朝鮮人が暮らしている地域があり、そこへ行ったらどうかとソ連側から勧められたらしいのですが、彼女ははずれ私のことでは知れる。そんな所へは行きたくないと断ったそうです。そしてカクイの造船所の雑役の仕事を与えられ、ここで暮らすこととなったのです。日本軍人の性的玩具にされたことは朝鮮の女性として大変な恥辱であり、故郷へ帰りたくても帰れないと言って彼女は泣いているそうです。

アーニャは言いました。「ヒサシは学生だった

から、そんな悪いことはしなかっただろうけど、日本軍はそんな悪いことをしていたのよ。」私は何ひとつ反論できませんでした。北支転戦の兵士たちの話などに、古参兵が中心になって、中国女性にかなり乱暴してきたらしいことは、彼らの尾ひれをつけた自慢話の中に窺えました。また、一方ではソ連軍が満州で日本人難民に対して行った非道には許し難いものがあります。それが戦争だったのです。

アーニャとは、それから一言も口を利くことはありませんでした。

#### 十七 戦艦ヤマトそしてクビ

昭和二十三年二月ころだったでしょうか。私の仕事は順調に進んでいるように見えました。造船所にチタ地区工場最高責任者（ジェレクトル）が視察に訪れることになりました。あれほどノルマ・ノルマで仕事を追い回してきた工場幹部が、工場内の徹底的清掃をやかましく言ってきました。一週間くらい、生産を止めて大掃除、引込線の枯

れ草まで丁寧に抜き取る騒ぎでした。私は事務所の屋根に乗って、枯れたペンペン草を抜く仕事をさせられました。寒さは峠を越してはいましたが、屋根の上は冷たくて滑りやすく大変な仕事でした。怪しげな製図をしていた方が、カネにもなるしよほど楽だとロシア人青年とぼやきながら、木の皮で葺かれた屋根をタワシでこすっておりました。

視察の当日、太った白ブタのようなジェレクトルが工場へやってきました。当然現場事務所にも姿を現しました。日本人がいるのというので、私に近づいて簡単な質問をしてきました。「今何歳になるのかね。」「早く帰りたいだろうね。」「日本へ手紙は書いたかね。」「私はできるだけ丁寧な返事しておきました。アブローシキンは冷や汗もので聞いていたようですが、私の対応に満足そうでした。」

しかし、数日後、驚くようなことが起こりました。私は造船所をクビになったのです。理由は「彼はロシア語が分かる。造船所の秘密がもれる。」



というものでした。

ラーゲルの所長はカピタン（大尉）でしたが、「日本はヤマトを造った。こんな小さな川船に秘密なんかあるものか。」と怒っていたそうです。

No.2の稼ぎを失ったので、独立採算制のラーゲルとしては、所長も頭の痛いことだったでしょう。とにかく、私はエモーをクビになったのです。

#### 十八 建築現場へ転職

仕方なく私は建築現場へ行くことになりました。室内作業に慣れていた体には、屋外作業の寒さが応えましたが、もう三度目の冬、木造住宅現場に木切れはいくらでもあり、焚き火などして日を過ごしていききました。

普通の家は四部屋でした。田の字つくりとか、中央にレンガ積みのでーチカを配して、四部屋すべてがペーチカの壁に面して暖房される仕組みで、生活の知恵とはいえ巧くできたものでした。荒っぽい角材をダボ穴でつなぎながら、積み上げ

る工法で、四隅の切り込みはロシア人工が手斧（タポール）で器用に加工していました。角材と角材の隙間には山の苔を楔でうちこんでいきます。厳しい冬に備えて、この仕事は重要で、ロシア人監督がワーワー言っておりました。内壁は細い板を斜め十文字に打ちつけ漆喰と石灰で仕上げます。これでは寒さは侵入できないでしょう。厳冬期でもペーチカを威勢良く焚くと、室内はワンピースでも過ごせるくらいに温まるようです。ラーゲル生活の私たちがから見ると、うらやましいような家が出来上がりました。

ソ連に個人住宅はないようです。みな国から支給される住宅です。デザインもみな同じ、土地も私有ではありませんから、住宅建築場所など、いくらでもあると言う感じで、カクイの町の予算次第で何軒でも家が建ちます。段々老朽家屋を建て替えていくという計画経済！なのでしよう。

ある時、六部屋もある建物を建てることになりました。田の字造りですからペーチカは二カ所に

なります、高級住宅という訳です。壁になる柱も太い物でした。

ところがシロコフが度々現場へ来ては、特に壁の隙間へ打ち込む苔をやかましく点検していました。彼の上司の党員の家になる予定だったようです。党員の家は六部屋の高級住宅、シロコフの気の使いようは尋常ではありませんでした。大工の親方（マッセル）が、あいつのコムサモールの仕事はどうなっているんだと陰口を叩いていました。

#### 十九 ピオニールの英雄

ある時、シロコフが「ヒサシ今日は良い所を見に行こう。マッセルの許しはとってあるから。」といい、町の中心部にある大きな建物へ案内してくれました。教室のような大きな部屋があつて、百人近くは楽にすわれるでしょう。

正面に額入りの大きな肖像写真が三枚、左はスターリン、右はレーニン、お定まりの配置です。中央にまだ十歳そこそこの、幼さの残った少年の肖像が掲げてあります。不思議そうに私が眺めて

いると、シロコフは「今日はこれをヒサシに見せたかったのだ。この少年は我々の誇りなのだ。」と目を輝かしながら、少年について語り始めました。

当時のソ連では、小学生くらいまでの子は「ピオニール」という幼・少年の組織に入るようになっていたようです。英語で言うところの「パイオニア」に当たる言葉です。シロコフによると、この少年は我が身を犠牲にして、反革命の陰謀を止めたというのです。

ピオニールで常に教えていたことは、偉大なる同志レーニン・スターリンの指導の下、偉大なる革命を成し遂げたソ同盟という祖国を、革命に反対する敵から守らねばならないとされてきました。ソ連という言葉は実は禁句で「ソ同盟」と呼ばねばならないとされてきました。同じじゃあねえか、など言おうものなら「ソ同盟に仇なすファッシスト」としてひどい目にあいます。レスプレーブリックというロシア語の翻訳の問題なのですが、ラ

ーゲルの中で始まった「民主化運動」とやらで、お先棒を担いだ連中がわあわあ言っていたことでした。

シロコフによると、ある日、少年は家で父親が「昔の生活の方がよかった。」と、今の生活に不満を言うのを聞き、日ごろ教えられていた通りにピオニールの集会でそのことを報告しました。警察がすぐ少年の父親を捕えて、警察署で尋問したところ、父親は「たしかに私が言いました。」と認めてしまったようです。「昔の方がよい。」それは絶対、口にしてはならない言葉だったので。現在の革命体制を否定する言葉でしたから。

当時のソ連では、警察内部の政治部が裁判の一切を仕切りました。裁判官も弁護士もなく、青い帽子の政治部が「有罪」と判定すれば、即決定だったのです。「反革命」は最も重い罪でした。父親は警察の裏庭に引き出され即刻、銃殺されたのです。

遺体が家に送り届けられ、狂気のようになった

母親と、兄が少年を烈しく責めたのです。不幸なことは立て続けに起こりました。少年は転倒して打ち所が悪く、死んでしまったのです。母親と兄は直ちに逮捕され銃殺されました。少年の家庭は全員が死んでしまったのです。

少年は我が身を犠牲にして、ソ連国家を救ったと位置づけられました。この美談は全国のピオニールに伝えられていくことになり、今日の前に見える写真となって、少年の功績が讃えられていたのです。

シロコフの目は異様に輝いていました。「この少年は俺たちの誇りなのだ。」多分に共産思想の影響を受け始めていた私にとっても、余りにも残酷な話でした。シロコフの家の中はどうなっているのだろう。気楽に話もできないではないか。暗然たる思いでした。

それから四十数年も経って、一九九一年の秋、ソ連は崩壊しました。間もなくNHKの特別番組「アーカイブス」で、この少年の話が放送され、

私は事実であったことを知りました。暗く辛い思い出になっていきます。

## 二十 民主化運動

ブカチャチャのころから既に民主化運動なる動きはありました。共産党小史に従い、先ず社会改良運動から始めた民主化運動でしたが、チタの袴田学校卒業生が各ラーゲルに配置され、民主化運動の指導者として、ラーゲル司令部の青帽子にも後援してもらって、烈しく動き出しておりました。

カクイのラーゲルは小規模なこともあって、まとまりもよく、また、技術屋集団がいて稼ぎもよく、ラーゲルの収入もよかったようで、食事などは食堂でするようになっておりました。勤務は昼間だけ、炭鉱のように夜の仕事はありませんでした。

昭和二十二年の中ごろまでは、そんなにギスギスしたところは全くなく、ブカチャチャに比べると、平穩に過ぎておりました。

小人閑居して不善をなすとは巧い表現です。軍

隊組織もだいぶゆるんできて、かつてのように古参兵だけのさばることも減ってきました。しかし、やはり昔の地金がでるといふか、博打などが流行り、賭ける物がありませんから、食堂の食券までかけてしまう兵士が出てきました。顔ぶれは決まっていたようですが、工場から固い紙切れなどを拾い集めてきて、見事な花札を熱心に作っておりました。絵もなかなか優れたものがあつたようです。オイッチヨ株とかいっていましたが、数字の和が九になるのが最高とかで、四、五人が集つてきて、その真剣さなど、寒気がするほどの氣迫でした。彼らの博打とは神聖なものなんでしょう。食券を取られてしまったら、晩飯抜きということもおこります。

しかし、取られた兵士は、取った兵士と一緒に食堂へ行くのです。二人分の食事などは大抵一人で食べてしまいます。負けた兵士に少し分けてやるようなことは絶対にありません。それは神聖な掟なのだそうで、余計な食べ物をドブへ捨てても、

負けた奴に恵んではならないのです。私はあきれ返って見ておりました。

しかし、次の日、負けた兵士は、また目の色を変えて博打をやっているのです。一番強かったのが磯貝班長、典型的古参兵です。位は伍長くらいでしょうか、私がNo2の稼ぎ頭だったころは私を「候補生」と呼んで、一目おいてくれていたようです。

カクイは半地下式のカマボコ型のラーゲルでした。百人ほどの定員の建物で、中央通路の両側に二段式棚が作られ、防寒に優れ、少人数のラーゲルとしては最高な建物だったでしょう。そんな建物が三棟ほど並び、後は大隊本部とソ連司令部、私たちの食堂、洗濯場などがありました。

袴田学校からアクチブという民主化運動指導者が派遣されてきたのは昭和二十二年の秋ころだったでしょうか。まず、階級意識に目ざめない者を日本に帰すことはないという脅かしから始まりました。階級意識って何だ？そこからカクイの運動

は始まっていきました。マルクス式の考え方は人々を資本家と労働者・農民、そして資本家に奉仕して僅かの蜜を吸わせてもらっている知識階級などに分類しています。資本家は、人々が階級意識に目覚めるのを恐れ、悪辣な妨害をしてくることになっていました。労働者・農民こそプロレタリアとして、世の不平等をなくすように立ち上がるべき主人公だという理屈で、人々を煽り立てたのです。

目覚めないと帰さない、これは効果がありました。俺は資本家に騙されて博打をやらされてきた。変な理屈でした。そして資本家に奉仕する知識階級として、私などがインテリゲンチヤという悪人であると、全体集会で名指しで攻撃され始めました。音楽学校を出て将校となった中尉がいましたが、インテリの代表として叩かれ始めました。私がいっ磯貝班長に博打をしると勧めたというのか。質問などしようものなら、お前は全然反省していないと逆ねじを食らいました。磯貝班長こそプロ

レタリアの代表になるべき階級の出身である。飯島などは資本家に奉仕して……無茶苦茶な論理でした。ラーゲルの中は段々革命歌の練習で割れるような騒ぎになっていきました。昼間働いてラーゲルに戻って休憩、そんな雰囲気以前にはあったのですが、袴田学校から人が来て以来、ラーゲルの中はとげとげしい雰囲気が一変していきました。

彼らはアクチブと称され、積極派の意でしょうか。アクチブに密告されたら、他のラーゲルに飛ばされるらしいとか、密告すると食券一枚をくれるそうだという噂もありました。誰が食事を二回するか、お互いに疑心暗鬼の嫌な空気が生まれていったのです。しかし三棟あるラーゲルで、博打は見事にピタリとなくなりました。それが民主化運動の成果の最大のものでしたでしょう。

一度、食堂にいた時、突然私が指名されて、壇上に立たされ、アクチブから烈しい攻撃を受けました。まだエモーで働いていたころでした。私が

最も危険なファッシストだということです。何？

と思つたら、出身が軍官学校だということです。自ら進んでファッシストへの道を選んだ男だ。誰が出身を教えたのでしょうか。ブカチャチャから一緒に来た人たちではなさそうです。とすると、ソ連司令部しか考えられません。青帽子のやつたことでしょう。私の雑囊の中を調べた形跡もありました。家族の写真を未練たらしく未だに持っているというのです。父親はレーニン、母親をスターリンとして生まれ変わらねばならぬ。(あんな髭を生やした不細工な母親がいるかい) 思わず吹き出すような理屈でした。言いたい者には言わしておけ。飯島を日本へ帰してはならぬ。それが結論でした。なるようになれ、それしか方法はありませんでした。

## 二十一 A + B

建築現場にも慣れてきて、やっと遅い春がやって来ました。昼休み、ロシア兵が私の所にやってきて、宿題が出て困っているけど教えてくれない

かというのです。見ると数学の問題で「 $A + B$  かつ  $2$  乗」といった乗法公式程度でした。図を描いて説明すると、よく分かったといって喜んで帰って行きました。そして次の日も、次の日もだんだん若い兵士が集まるようになりました。

彼らは十三歳、十四歳のころからヨーロッパ戦線などへ駆り出され、ドイツと戦ってきたのです。ろくに教育など受けてこなかったのです。それ而今、将校たちから教えられていたようでした。私がエモーにいたというので、教育程度が高い人と思ったようです。  $A + B$  までは良いとして、  $M + N$  とか  $3M + 2N$  などとなるとさあ大変、チンプンカンプン。同じじゃあないかといっても理解できないのです。ましてマイナスがつこうものならお手上げでした。彼らの顔はだんだん純情な若者の顔に戻っていききました。

ある時、一人の兵士がマンドリンと呼んでいた携帯軽機関銃の弾倉をあけて「見てみる」というのです。弾丸が入っていないのです。重いから持

ってこないというのです。「じゃあ、逃げるかな。」などと冗談を言うと、「よせ、よせ、もう直ぐ帰れるからさ。」と言って、チタ周辺のラーゲルの帰還状況を話してくれました。彼らも日本人がいなくなれば、兵役が終わるかも知れない。故郷へ帰れるかも知れない。そんな思いがあったのでしよう。

## 二十二 ナホトカにて

戦後、不法にも六十万余の日本人をシベリアに抑留し、鉄道、炭鉱などで強制的に労働させ、しかも劣悪な環境の下で、多くの死者を出していることが、英米を中心とした連合国から抗議され、ソ連としてもこれ以上の抑留は無理と判断したようです。

昭和二十二年ごろから始まった帰国は二十三年に集中的に行われました。カクイのラーゲルに帰国命令が出たのは四月末のころでした。

アクチブの連中が中心となって、「ソ同盟に感謝する」といっては連日革命歌の練習でした。い

うことをきかないと、ソ連が後ろについていますから、皆従順でした。一応整然と革命的な日本人が出来上がっていったのです。

シロコフがピオニールの集会所へ私を連れて行ったりしたのは、おそらく目ぼしい日本人をソ連の意に従う人間に改造しようとした意図があったからでしょう。

帰国の日、ラーゲルの傍らに帰還列車が臨時停車、アクチブの号令の下、整然と私たちは乗り込んでいきました。リューシヤ、シロコフが見送りにきてくれました。アブロキシンや他の人たちの伝言も伝えてくれました。できるだけ、好感を持って国へ帰せという意図があったのですが、正直いって嬉しいことでした。

帰還列車は二十トン貨車の中に棚を作ったものでしたが、こういう列車が何本も編成されていたでしょう。革命歌の大合唱の下、列車はナホトカへ向かってカクイを出ていきました。満州から拉致されて来たときとは違い、警戒兵がいるでも

なし、これで本当に帰れるのだろうか、まだ疑心暗鬼でしたが、列車は北上してシベリア本線に入り、そのまま東の方へ、ナホトカへ向かって走って行きました。

ナホトカ港の周辺は大変な混雑でした。一応、大きな建物がいくつもあって、宿泊はできるようになってはいたのですが、至る所でソ同盟に感謝する集会が開かれて、革命歌の大合唱が繰り返されておりました。

階級意識に目ざめた我々の帰国を、日本のファッシストたちは恐れている。だから船を回してこないのだ：という事になっていました。終結地に入れず、そのまま引き返していく列車があったことは確かです。

一番気をつけていたことは、荷物を調べられることです。もし、死亡者名簿など持っていれば、即、ソ連に仇なすものとして、奥地へ送還されてしまうでしょう。ソ連が一番嫌がることだったので。私は必死になって亡き友の名前を頭の中で



繰り返し、繰り返し暗誦していました。彼らにしてやれる友情はそれだけしかないのです。三十数人の名前、死亡の日時、住所、親の名前など暗誦しておりました。

そんな雑踏の中、付き添いでヒロクの病院へついて行った鈴木衛生兵に会ったのです。「鵜飼はどうした？」最初に訊ねたのはそのことでした。

鈴木さんは彼が死んだというのです。結核性腹膜炎、病名はブカチャチャのころから見当はついていたようですが、リバノール外用薬しかない現状ではどうしようもなかったというのです。暗然たる思いでした。鵜飼よ。貴様はなぜ死んだ。先に帰って蒲田の家へ連絡してくれる約束だったじゃあないか。死者には慣れていた私でしたが、やりきれない思いでした。

数日後、私たちは信洋丸に乗船することができました。アクチブは既におとなしくなっておりました。兵士たちの中に、公然と「あいつ等、さんざん俺たちを痛めつけやがって。船に乗ったらこ

っちのもんだ。海へ叩き込んでやる。」大声で騒ぐ人たちもいたのです。

食事をみた時、これで日本に帰れるなという感慨に耽りました。梅干、たくわん、夢にまで見た日本でした。ブカチャチャで飢えた私たちは、食べ物のお話をしながら寒さに耐えていたのです。「たくわん」何というなつかしい言葉であったことか。船は波静かな日本海を一路舞鶴へ向かって走っていききました。

### 二十三 舞鶴の港

日本が見えるぞ……感激でした。遠くに日本の山々が黒ずんで見えてきたのです。二日目か三日目に舞鶴港の入り口にさしかかっておりました。入江の中を船は静かに進みました。岸辺で日の丸の旗を振ってくれている人たちがおりました。私たちは聞えるはずもないのに「オーイ オーイ」と声をあげて好意に迎えていききました。昭和二十三年六月三十日の朝でした。

港では最初にDDTを頭からぶっかけられて驚

きました。引揚援護局から求められたことは、やはり知れる限りの死亡者の情報提供でした。協力してはならぬと騒ぐ連中もおりましたが、もはや誰も言うことを聞く者はいなかったでしょう。私は三十数人の名を一気に書き上げていきました。彼らの恨みを晴らすには、これしかないという思いであったように記憶しています。

死者の名前、部隊所属、死亡日時、年令、住所、親の名など。そして自分の目で見た場合は確度「甲」、聞いた話だが、確かであるときは「乙」、風聞程度は「丙」でした。

鵜飼修次 軍官学校七期生六連隊五区隊

昭和二十二年十一月ごろ 二十歳

愛知県東春日井郡坂下町字西尾

父：鵜飼庄市 確度「乙」

舞鶴から自宅へ電報を打てるようになっていました。昭和二十年三月、東京大空襲があったことは聞いていましたが、東京の自分の家、関係の深い親戚三軒、しかし打った電報は、みな転居先不

明！電報が戻ってきてしまったのです。しかし、それ以上どうしようもないことでした。父の姉が福岡におりましたので、そこへも電報は打っておきました。その家は弁護士などしていた名家で、空襲にはやられていたのですが、転居先がハッキリして、私の電報が伯母の手に届いたので「シズオカエカエレ ミナブジ レンラクス

ミ ヨシ」伯母の名でした。「ミナブジ」その時の私の気持ちが分かって頂けるでしょうか。みな無事だったので。それまで私は無縁故者の収容先である上野寛永寺行きグループに入っていました。急遽、静岡行きに切り替えました。

七月四日の朝、蒲田の家を出てから三年六カ月が経っておりまして。静岡駅頭で見た母はめっきり老け込んでみえました。小学生だった妹はすっかり娘らしくなっていて、驚きました。

二十四 再出発

家に着いて、最初に考えたことは、三年遅れたが仕方がない、大学へ行ってやり直そうということ

とでした。そこで地元の静岡高校（旧制）を訪ね、途中編入を申し込みました。士官学校や兵学校に在学していたものが海外から復員してきた時は、途中編入してくれると豊橋に復員してきた友人から連絡がきていたからでした。

静岡高校の返事は意外なものでした。その通達は二十三年三月までで期限が切れているということです。私は憤慨しました。まだ気が荒かったころですから、事務局の人に三月までなら編入できます。七月では駄目だとはおかしいじゃないか。と食ってかかりました。

もめていると、通りかかった教授らしき人が、確かにおかしいけど、通達に期限があったのは事実だろう。少し日にちをくれないか。連絡するからとなだめてくれました。

数日後、学校から連絡が来て、編入を認めるといつてきました。後期十月から登校して宜しいとのことでした。学校へ行って、教授に会い話を聞きました。校長が、それは文部省がおかしい。経

理学校出身者なら問題はない。入学を許可しない。と決めてくれたそうです。校長には、権威に支配されない独立した気風があったのです。

その話を母にすると、母が泣きながら、初めて家の事情を話してくれたのです。妹の女学校へ月謝を払うことができなくて、このままでは二学期から退学しなくてはならない状況だったのです。舞鶴でもらった僅かの引揚手当は妹の月謝にあてました。私は大学へ進む希望を捨てざるを得なかったのです。

隣の家の人が紹介してくれて、ある時計製造会社へ就職しました。そこは、国が重点的に戦後の日本の復興のため、新産業を興そうとしていた会社で、課長は海軍大尉、東京帝国大学工学部出身、他にも意欲満々のメンバーが揃っていた会社でした。東京府立工芸機械科卒、問題なく採用されました。

検査課に配属されて、それなりに新生活を始めました。シベリアから帰った仲間は、全国に散ら

ばっていましたが、それぞれ名の知れた大学、高校（旧制）へすすんでいく様子が手紙等で分かり、暗然たる思いはしていましたが、これも人生、あきらめざるをえなかったのです。

いつ行けるか分からない大学でしたが、旧制中学では戦後の新制高校卒に対して一年学歴が不足でした。いつまでも途中編入は無理でしょうから、私は定時制へ通って高校卒の資格を得ておく必要がありました。

静岡高校という地元の学校を訪ねたところ、工業卒だから単位が不足だ。定時制三年なら編入できるが、四年からは無理だと言われました。そこでひと悶着やりましたが、校長の段階でも断られました。次に静岡市立高校を訪ねました。そこでも同じ返事でした。気の荒いころですから、こっちは経理学校を合格したんだ。二年間も定時制へ通っていられるかと、定時制主任と争いました。彼が言いました。よし、編入試験をやって、よかつたら四年へ入れようじゃあないか。悪かつたら、

覚悟して三年からやらないか。「面白い、売られた喧嘩は買いましょう。」私がそう言つたと、後に定時制主任が笑いながら言っていました。

結果は数学満点、国語零点！ ひどい話です。国語の問題とは「自然主義文学の発生について記せ。」それだけでした。癪に障って「島崎藤村に始まった」と、たった一行だけ書いて提出しました。先生が私の目の前で零点をつけ、そして、合格したのです。校長が、通達はあるがそんなものはどうでもよい。要は本人だ。形だけ編入試験をして、力があるから入学させたことにしてしまえといったそうです。国語は定時制の主任担当、校長も主任も私の人生の上で、恩義を感じている人たちです。文部省という官僚通達などどこふく風という気概を持った人たちだったのです。静岡高校の校長は後に県の教育長になった人で、官僚的発想しかできない人であったようです。かくして昭和二十四年の春から昼間は時計会社、夜は定時制へ通う生活が始まりました。

二十五 会社倒産そして代用教員へ

昭和二十三年六月、政界を揺るがす昭和電工疑獄という事件が起りました。政府系の融資機関、復興金融公庫の融資に対し、有力な政治家が絡んだ大事件でした。結果として復興金融公庫が閉鎖されることとなったのです。勤めていた会社はただ創業開始して間もなく、思想は高かったものの財力はなく、政府の融資がなくなつては、ひとたまりもありません。たちまち倒産、私は職を失いました。地元の大事件でした。

たまたま清水にアメリカ資本の石油精製会社ができることになり、時計会社の同僚が紹介してくれました。親戚に石油会社に土地を提供したりして、その会社に有力な知り合いがいる人がいる。自分もそこへ行く。府立工芸なら立派なものだ。文句なしに入れると叔父さんも言ってる。と誘ってくれました。喜んで応募したのですが、人事部でも問題なく採用が決まり、上司の決済をしてもらう段階になってアメリカ筋からクレームがつい

たそうです。シベリア帰りは赤化された思想を持つていて危険がある。採用できないと断られたそうです。憤然としましたが、相手がアメリカ人ではどうにもなりません。長い間、シベリアで苦勞してご苦勞様でした、表ではそういうものの、内心では危険だと警戒されていたのは世の風潮でもあったのです。

市高の校長が心配してくれました。「いつかは大学へ行ける日もくるだろう。高校卒の資格だけは持っていた方がいい。小学校の代用教員になることとなりました。

大問題がおきました。教員になるには、「公職適格検査」を受けなくてはならないものです。進駐軍通達で軍国主義的人物を公職につかせてならないという趣旨でした。

結果、驚くようなことが起きました。私は「不適格」とされたのです。「自ら軍の学校へ行くような人物は、公正たるべき公務員には適さない。」という理由でした。審査したのは中部教育事務所

という役所で、所長が裁決したというのです。

市高の校長が激怒しました。「何をいうか。あの男は戦時中、各中学校などを回って、今年の予科練希望者が少ない。軍に非協力的であると静岡連隊に申告するがよいか。などと脅かしては、中学関係者を困らせていたのだ。その本人が自ら軍の学校に云々とはなにごとだ。公務員に適さないのであつた男だ。」というのです。そして、校長が直接、中部事務所へ乗り込んで、強硬に抗議してくれました。所長はさすがに困ってしまい、出された案が「事務員適格」という妥協案でした。実際には教員になったのですが、戦前なら軍に、戦後なら進駐軍に、その時その時の権力者に従順に従うだけの官僚が要職に座っていたのです。

シベリアから復員してきた仲間、全国の有名な大学や旧制高等学校などで二年生、三年生になつていきました。そんな情報を聞く度に、己の不運を嘆く気持ちはどうしようもないものでした。そして、学校の中で私の身分は助教諭、師範出の

同年輩は正式の教諭、あんな能力の低い連中がと、私の気持ちはひねくれたものになっていきました。

## 二十六 教育界から去る

始めから、教育界にはなじめない気持ちを持つていたと思います。自分でもいけないと分かつていても、何だ、あれは。というようなことが多くて、我慢ならなかつたのです。

戦時中は苦勞したものだ。運動場を掘り起こしてサツマイモを植えた時など、大変だつたよ。そんな話をしているのを聞くと、このバカと怒鳴りつけたくなりました。

始めから私は教育界になじめない宿命を持つていたのかも知れません。ただ子供たちに教えるということは楽しいことでした。

昭和四十八年三月、私は教育界を去りました。四十六歳の時で、女房も子供もあるというのに、随分無茶なことをしたと今でも思っています。

前々から私の教育界における存在を見ていた人から、ある会社の実質的経営者になつてみないか

と誘いをうけていました。実業界のことなど何も知りませんでした。たった一度の人生、冒険してみるのもいいか。もし、うまくいかなかったら数学の家庭教師でもやれば、今の収入くらいは稼げるわいと、教員生活を去ったのです。

実業界は頑張れば結果が出る社会でした。勤めた年の暮れにはオイルショック、夜も寝られぬようなこともありましたが、それを乗り越えたところから会社業績も伸び、また韓国との木材取引などの機会があり、私は朴大統領と同じ軍官学校出身者ですから、重要な立場になっていきました。

我が人生を振り返ってみて、順風満帆には程遠い人生でしたが、家庭的にはよき女房にめぐり合っている、男子が二人、それぞれ大学を出て、何とか世間には名の知れた会社に勤め、家庭を持って孫もでき、まあまあ終り良ければすべて良しか。など、不遜なことを考えております。

シベリアで亡くなった友の分まで長生きしていただきたいと思うこのごろです。

## シベリア抑留記

愛知県 加藤 三喜男

私は大正十一（一九二二）年三月春日井市坂下町で八人兄弟の長男として生れ育った。

成長して国鉄に就職し、浜松の車電区と言うところが、前年肋膜炎を患ったためか第一乙種合格で、兵隊にすぐ行くことはなかったが、昭和十八（一九四三）年四月、家から召集令状が来たからすぐ帰れと電話があり、職場の皆さんに送別会をしていただき家に帰り準備した。入隊の日の前日、親戚を始め隣組、友人、知人達と氏神様に参拝し、お別れの挨拶をして名古屋の親戚の家に泊った。朝一番の電車で中部第十三部隊の前に行くと、役場の兵事係の鶴飼秀三さんが待っていた。

召集者達五、六人が集ると第十三部隊の兵隊に引率され、営門をくぐった。営舎で軍隊の被服が支